

同一性地位における自己意識と他者意識

本田 時雄・岩本 智華子

Self-consciousness and Other-consciousness in Identity Statuses

Tokio Honda, Chikako Iwamoto

はじめに

人間は、受精から死に至る一つのライフコースをたどる。時間の流れとともに、身体的・心理的・認知的・社会的など、さまざまな側面において、そしてそれぞれの側面が相互に影響し合いながら人間は変化していく。

社会のなかで一人の人間として生まれ生きていく過程には、一定の移行や成就が起こる時期が社会的に期待される（社会から要請される）社会的時間の枠組みが存在したり、これまでの研究による各発達時期に達成可能な部分が多岐にわたって予想できる、予想的枠組みが存在する。これは、環境・地域・社会・時代・文化などに強く影響され、個人にとっては生きていくうえでの生き易さ、適応の目安になるものだと思われる。または、ライフコースの進行状況を特定の文化や社会（自分の所属するそれ）、環境に照らし合わせてチェックする基準ともいえよう。

人間が一生を通じて変化すること、環境に適応すること、そして各個人のライフコースの進行目標に近づき変化していくことを発達というが、それは幼児の歩行にみられるように低い段階の課題をマスターしてから次の段階に移行するような段階を踏むものと考えられる。

したがって、いくつかの段階に区切って人間の発達をみることができる。そして段階ごとに課題をあげることは、考察の際、有効な手段であると思われる。社会・文化・時代性を考慮する場合、アイデンティティ（自我同一性）は、ライフコースの主題となりうるであろう。

青年期において、人格構造の再体制化が、様々な影響を受けて行われることは明白な事実である。自我同一性確立への動きは、青年の行動を統制する社会・文化的規範の差異に関係していると考えられる。現代の日本において、国際化などによる価値観の多様化や実力主義的な意識の芽生え、マルチメディアによる情報の氾濫から、青年はおとな社会に入る時、心理的混乱や葛藤を避けて通ることはできないだろう。ますます複雑化した現代社会が人格構造の再体制化に及ぼす影響は大きく、自我同一性確立の道程は困難なことが予想される。

しかし、青年期にあたる大学生についてテレビや新聞・雑誌などに掲載されるのは、「アパシー」「大人になれない」など、青年期特有の熱心さ、情熱、好奇心といったことから、遠く離れたことばかりである。

青年期は最も社会の影響を受け易く、青年期の自我同一性確立への動きが、社会・文化的規範に関係していると考えられるならば、その動きは活力や好奇心という動きに現れそうなものである。

現代青年は、あまりの多くの刺激に感覚が麻痺してしまったのか、それとも刺激に反応できずにいるのか、それがどのようなことであれ、メディアに登場したようにパワーに欠ける学生の姿は、少なくとも社会を映したものであろう。

青年期の特徴である「自己への問いかけ」とは、まさに自己を意識することである。自我同一性達成の道程は、こうした自己を意識することに出発点を置く。重要な他者からの期待や価値づけを取り入れながら、自己を意識し、自己の経験から得た自己関連情報を構造化した自己概念をもとに、自己の本質は「不変である」という感覚を持つようになる。自我同一性達成の様相をみる場合、自己意識は重要な視点となり、その特性と、その程度をおさえることは意味のあることであらう。

1. 自我同一性

(1) 生涯を通じての発達と自我同一性の形成——エリクソンのアイデンティティ論——

エリクソン (Erikson, E. H.) は、「幼児期の社会」(1950) を著し、その中で自我形成の漸成発達理論を提唱した。アンナ・フロイト (Freud, A.) に精神分析の指導を受けたエリクソンの理論は、ジームクント・フロイト (Freud, S.) の心理的・性的な次元が自我発達という心理・社会的次元となっている。

すなわち、エリクソンは、生を受けて死に至るまでのライフ・サイクル全体を見通しながら人間の生涯発達を包括的にとらえ、生涯にわたる自我の形成過程の様相を、対人関係を含む社会的側面を積極的に取り込んだ心理・社会的発達の視点から、個体発達分化と呼ばれる漸成発達図式を示した。

彼は、ライフ・サイクルを心理・社会的な自我発達の観点から8段階に区分し、それぞれの段階に固有の発達の課題・危機をあげている。それは、乳児期から始まり老年期に至るまで、①基本的信頼／不信、②自律性／恥と疑惑、③自主性／罪悪感、④勤勉性／劣等感、⑤アイデンティティ／アイデンティティ拡散、⑥親密性／孤立、⑦生殖性／停滞、⑧統合性／絶望、というように、各発達段階で対になって拮抗的に作用し合う、2つの要因間の葛藤があり、それが心理・社会的危機としてバランスのとれた健全な自我発達を脅かすというものである。人は、それぞれの危機の解決を自らの発達課題として取り組む中で、基本的な強さ (人格的活力) を身につけて、より健全な自我の成長を目指すのである。

アイデンティティとは、①自己の斉一性 (この自分はまぎれもなく自律性をもつ独自で固有な存在であって、いかなる状況においても同じその人であると他者からも認められているし、自分でも認めることができること)、②自己の時間的連続性と一貫性 (過去の自分も現在の自分も一貫して同じその人であると自覚することであり、さらには現在の自分から未来の自分をイメージできること)、③帰属性 (自分がいずれかの社会集団に所属して、その集団との一体感をもつとともに、他の成員からもその一員として是認されていること) の3つの基準によって定義される主体的実存的感覚あるいは自分意識の総体であるとしている。

(2) 自我同一性地位

今回用いた質問紙には、自我同一性地位を測定する質問が含まれている。自我同一性地位とはマーシャ (Marcia, J. E. 1966) によって考案されたものであり、自我同一性がどの程度形成され

ているかを幾つかの段階で示したものである。マーシャによれば、①役割の試みと意思決定期間という「危機」と、②人生の重要な領域に対する「積極的関与」の2つの基準によって、自我同一性の状況を自我同一性達成、モラトリアム、権威受容、自我同一性拡散の4つの地位に分類した。それらは次のようである。

- ①同一性達成 (identity achiever) : 心理的危機を体験し、その葛藤の中で自分の可能性を模索した結果、自分なりの解答を見出して、一つの生き方に対して主体的な選択と傾倒を行い、それに基づいて行動している状態をいう。適応的であり、自己決定力、自己志向性がある。環境の変化に対しても柔軟に対応でき、対人関係も安定している。
- ②権威受容 (foreclosure) : 自分の生き方について戸惑うことなく、両親や権威の期待や目標をそのまま受け入れていて、専心している状態である。一見同一性達成と同じように見えるが、環境の急激な変化などのストレス下で柔軟な対応が困難である。
- ③モラトリアム (moratorium) : 現在、危機を体験している最中であり、迷いながらも自分が傾倒すべき対象を見つけ出そうと努力している段階である。決定的な意思決定がまだできていないために、行動に曖昧さが見られる。
- ④同一性拡散 (identity diffusion) : 傾倒すべき対象をまったく持たず、自分の生き方がわからない状態であり、危機前後によって2つに大別される。
 - (1) 危機前拡散; 自分が今まで本当に何者かであったか曖昧であるため、自分が何者であるかを想像することが不可能な状態。
 - (2) 危機後拡散; 全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならない状態。

本研究で用いた自我同一性尺度 (加藤, 1983) によって測定された同一性地位は、6つに分けられる。これは、マーシャによる傾倒 (自己投入) の程度を現在と将来の希求に分け、さらに過去の危機により分類したものである。マーシャが分類した4つの地位と、同一性達成地位と権威受容地位との中間のA-F中間地位、モラトリアム地位と同一性拡散地位との中間のD-M中間地位が加わった6つの地位である。

2. 自己意識と他者意識

(1) 自己意識

自己意識を広辞苑で引くと、「自己自身に関する意識。諸体験の統一的・恒常的・自同的主体としての自我の意識。自意識。自覚。」とある。自己意識とは、自分自身に対して注がれている意識、またその状態である。

本研究で用いた自己意識尺度は、フェニグスタインら (Fenigstein, A., Scheier, M. F., and Buss, A. H. 1975) の自己意識の特性を測定する「自己意識尺度 (Self-Consciousness Scale) を後藤・辻 (1980) が翻訳した尺度である。この尺度は、因子分析により、私的自己意識・公的自己意識・社会的不安の3因子構造であることがわかっている。

- ①私的自己意識とは、経験している本人にしか観察できない私的な自己に対する注意の焦点づけ傾向である。感情・思考・理念などのように、それを経験している本人にしか観察できないプライベートな自己への意識である。
- ②公的自己意識は、自己が他者に与える印象や他者の自己に対する反応などへの注意・関心であり、自己の外見・服装や容貌といった他者にも観察可能な自己への注意である。また、他

者の視点から見た自己の意識であるということもできる。

- ③社会的不安は、私的自己意識と公的自己意識が生じた時に伴う不安である。社会的不安は、自己意識とは明らかに異なるので、自己意識は私的および公的自己意識の2つに別れる。

(2) 他者意識

他者意識は、自分以外の誰かに注意を向けることである。辻（1988）の研究により、他者意識も、自己意識尺度と同様の3因子構造であることがわかっている。

- ①内的他者意識は、他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識・関心である。外面に表出された他者の表情や態度などを手がかりにして、他者の内面を理解しようとし、他者の内面に注意を向ける傾倒である。
- ②空想的他者意識は、その場に現前する他者に直接意識や関心を向ける「直接的関心」に対し、現実の他者から離脱した連想的・回想的関心である。
- ③外的他者意識は、体型やスタイルなどの外面に表れた特徴といった、他者の外面への注意の焦点づけである。この注意・関心は、格好の良さなどの外面にとどまる。

社会の中で他者とともに生きていくうえで、自己意識同様、他者を意識しての自己呈示、他者を前にした時に生じる対人不安などを理解する上で、他者意識は不可欠な概念である。

3. 本 論

1. 目的

現代青年の自我同一性形成の現状とその様相を自己意識と他者意識との関係を中心に探究することを目的とする。

2. 研究方法

調査方法：自己意識尺度、他者意識尺度、同一性地位判定尺度を用いた質問紙法

調査期間：1997年9月30日から同年10月14日までの2週間

対象者：1997年度、文教大学越谷キャンパス在学中の学生264人

（教育学部87人、文学部95人、人間科学部82人

一年生67人、二年生65人、三年生67人、四年生65人）

3. 結果の分析方法について

①自我同一性地位について

自我同一性地位とはマーシャによって考案されたもので、自我同一性がどの程度形成されているかをいくつかの段階で示したものである。本研究では、加藤（1983）の尺度を用いた。

回答法は、「全くそうだ」から「かなりそうだ」、「どちらかといえばそうだ」、「どちらかといえばそうではない」、「そうではない」、「全然そうではない」までの6件法である。

現在の自己投入・過去の危機および将来の希求を算出し、その値の組み合わせによって各地位へと分類した。

各同一性地位への分類の流れ図を図1に示す。

次に、分類された6種の同一性地位ごとに、算出された「現在の自己投入」「過去の危機」「将

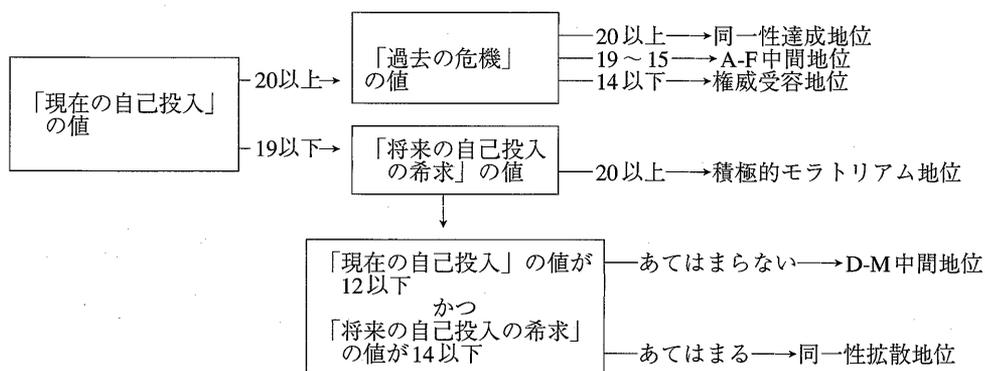


図1 各同一性地位への分類の流れ図

来の希求」の平均値に、有意な差があるかどうかを調べるために多重比較を行って検定した。

②自己意識尺度と他者意識尺度の構造を調べるために因子分析を行った。

③②の因子分析の因子得点を用いて、それぞれの尺度の因子がそれぞれの同一性地位において有意差があるかどうかを多重比較を行って検定した。

4. 結果および考察

1. 回収率

質問紙は、670部を配布し、322部回収することができた(48.1%)。そのうち58部は、不完全記入と調査期間外記入であったので使用しなかった。欠損58部を除き、264部を有効とした(有効回収率 39.4%)。

2. 同一性地位判定尺度について

①同一性地位の分類

| | | |
|----------|------|---------|
| 同一性達成地位 | 23人 | (8.7%) |
| A-F中間地位 | 34人 | (12.9%) |
| 権威受容地位 | 4人 | (1.5%) |
| モラトリアム地位 | 34人 | (12.9%) |
| D-M中間地位 | 145人 | (54.9%) |
| 同一性拡散地位 | 24人 | (9.1%) |

D-M中間地位が、145人で全体の54.9%を占めていることがわかった。同一性確立に到らず、積極的関与の低い学生の姿がうかがわれる。

そして、権威受容地位が、4人で全体の1.5%であった。親の価値観を鵜呑みにしている学生が少ないことがわかった。

②判定尺度の値の多重比較

各同一性地位は、「現在の自己投入」「過去の危機」「将来への希求」の組み合わせにより分類されるが、3つの値のそれぞれを操作的に分けているものもあれば、全く分類には関知しない場

合もでてくる。そこで、3種の値のそれぞれが、6つの同一性地位ごとに有意な差があるかどうかを検定した。

a) 「現在の自己投入」について

同一性拡散地位が極めて低く、A-F中間地位が最も高く、そして同一性達成地位、権威受容地位、モラトリアム地位、D-M中間地位の順に低くなっている。同一性拡散地位は、他の5つの地位と比べて低く、A-F中間地位・同一性達成地位・権威受容地位はモラトリアム地位・D-M中間地位よりも高かった。

b) 「過去の危機」について

同一性達成地位が最も高く、次いでモラトリアム地位、A-F中間地位、D-M中間地位、同一性拡散地位、権威受容地位の順に低かった。同一性達成地位は他の5つの地位と比べて高かった。モラトリアム地位はA-F中間地位、D-M中間地位、同一性拡散地位、権威受容地位と比べて高かった。A-F中間地位は、同一性拡散地位、権威受容地位と比べて高かった。D-M中間地位は、権威受容地位と比べて高かった。

c) 「将来の希求」について

モラトリアム地位は、他の全ての地位と比べて高かった。次いで、同一性達成地位が高くなっている。A-F中間地位・権威受容地位と続き、そしてD-M中間地位・同一性拡散地位は、他の4つの地位と比べて低いということがわかった。

過去の危機が20以上である同一性達成地位は、「自分は何者なのか、何をしたいのか、何をすることが自分らしいのか」など、社会的に自己定義する際に多くを悩み、悩んだ中で、今までの経験から見つけた自分を統合し、自ら築いた指向性を指針に社会に参与している地位である。自己への問い・疑問の期間をはっきりと認識し、認識することにより、それまでの自分（児童期までの親などの権威に同一化することで維持してきた自己）から選択的・主体的自己への移行に参与している。過去の危機を認識することは、アイデンティティ確立以後、主体的に自己選択したことへの自信と見いだした自己への肯定感を一層強め、ある領域における積極的関与も深めていくだろう。そして、将来の希求は、エリクソンのいう自己の時間的連続性から考え、現在の積極的関与が見られることから現実にも則した実現可能性の高いものであり、具体的にイメージできるものであろう。具体的なイメージがあるからこそ、積極的に関与していくことができ、肯定感が増しアイデンティティも確立できるのであろう。

A-F中間地位は、同一性達成地位や権威受容地位のように現時点で積極的に関与している領域があるため、同一性達成地位と同様に将来の希求は現実にも則したものであろう。しかし、同一性達成地位と権威受容地位の中間地位（親などの権威の期待や目標を受け入れ専心している地位と過去に「自分は何をしたいのか」を考えたことがある地位の中間）であるため、今とは違う自己の延長にある将来を希求しているとも考えられる。

過去の危機が14以下の権威受容地位は、「自分は何者なのか」を悩むことが少なく親やおとなの価値観をそのまま受け入れ、その価値観を基に現在の自己投入をしている。積極的に関与しているので、一見同一性達成地位と同じように見えるが、積極的に関与するものは、自ら悩み苦しんだうえに選択されたものではない。実際に自己投入している領域があることで精神的に安定しているので「自分は何者なのか」を悩むことも少ない。それまでに得た肯定感から将来への希求は高いであろう。

モラトリアム地位は、現在「自分が何者なのか」に疑問を持ち、いくつかの可能な選択肢の中で、解決に向けての模索途中である。そのために決定的な意思決定はできず、現在の自己投入が20以下という値に分類される。現在危機の最中であるため、危機は過去のものとして認識されない。

同一性拡散地位は、全てのことが可能だし、可能なままにしておかなければならないという特徴を持ち、そのため確固とした自己を決定することができない。将来に対する自己のイメージがなく、自由の制限に否定的なことから将来の希求が低いのだろう。危機を体験したが放棄した危機後拡散と、権威受容地位のように危機が少なく「自分は何者なのか」などの疑問を持たないことで自己イメージをつかみにくい危機前拡散が考えられる。

D-M中間地位は、現在の自己投入が19以下でモラトリアム地位よりは将来の希求が低く、同一性拡散地位より現在の自己投入と将来の希求が低い、モラトリアム地位と同一性拡散地位の中間地位である。「自分が何者なのか」という問いに対して模索しようという思いと、同一性拡散地位と同様に確固とした自己を決定することができない思いとが入り交じっているのだろう。

4. 自己意識について

構成要素の明らかにされている自己意識尺度を使用した。その自己意識尺度の構成要素が1997年文教大学在学中の学生のそれにあてはまるかどうかどうかを見るために因子分析を用いて検証をした。

辻(1993)の研究では、因子負荷量が、0.5以上を持った項目が採用されて、自己意識尺度は、私的自己意識、公的自己意識、社会的不安の3因子に分類された。社会的不安にあたる質問項目が、自己に注意を向けるという自己意識に相当しないものだと思われたので、私的自己意識と公的自己意識の因子にあたる質問項目で構成された自己意識尺度となっていると思われる。

本研究では、2因子に分類されることが予想されたが、因子分析をした結果、固有値1.42827以上、3因子が説明可能な因子として抽出された。3因子構造で累積因子寄与率は、52.2%であった。なるべく多くの質問項目を因子に含めたかったため、本研究では因子負荷量0.4以上の項目を採用した。また、既存の尺度の因子分析で、因子負荷量が0.5以下だったために切り捨てられた質問項目が、本研究では、0.5以上になっていたものもあった。

因子分析の結果、21の質問項目は以下の通りに分類された。

第1因子は、固有値6.99756で因子寄与率は33.3%であった。

4. 知らぬ間に自分の感情や心の動きに注意を向けている。
1. 自分の動機や気持ちをいつも分析している。
9. 常に自分自身を理解しようと心がけている。
21. たえず自分のことを詳しく調べようとしている。
6. 自分の感情や気持ちに、注意を払っていることが多い。
17. 自分についてよく考え込む。
12. 何かの課題に取り組んでいるときでも、心の動きを意識している。

などの項目が高く負荷していた。これらの項目は、感情・動機・思考など、経験している本人

にしか観察できない私的な自己に対する注意の焦点づけ傾向である。よって、第1因子を「私的
自己意識」の因子と命名する。

第1因子については、辻（1993）の研究結果と因子負荷量の違いはあるが、同じ項目が含まれて
いた。

第2因子は、固有値2.53436で因子寄与率は12.1%であった。

- 2. 自分が他の人にどう思われているかが気になる。
- 5. 自分が人にどのように見えるかを意識している。
- 15. 人によい印象を与えたかどうか気になる。
- 10. 自分の性格が人にどのように見えるかを意識している。

などの項目が高く負荷していた。これらの項目は、自己が他者に与える印象や、他者の自己に
対する反応などへの注意・関心であり、もちろん、他者にも観察可能な自己への意識を表してい
る。また、他者の視点から見た自己への意識ということもできる。よって、第2因子を「内面的
公的自己意識」と命名する。

第3因子は、固有値1.42827で因子寄与率は6.8%であった。

- 18. 自分の体形やスタイルを常に意識している。
- 7. 自分の外見には気を配っている。
- 20. 出かける前には必ず鏡を見る。
- 19. いつも自分を意識している。
- 13. 自分をどのように見せるかに関心がある。

などの項目に高く負荷していた。これらの項目は、自己の外見・行動スタイルなど、自己の外
面に対する注意・関心である。第2因子同様、他者にも観察可能な自己への意識である。よって、
第3因子を「外面的公的自己意識」と命名する。

辻（1993）の研究結果では、第2因子と第3因子が一つの因子にまとめられて分類され、「公的
自己意識」の因子と命名されていた。公的自己意識とは、他者からも観察可能なパブリックな自
己を意識する傾向である。容姿・容貌や外見行動などのように他者からも観察可能なパブリック
な自己に対して、自分の外見や行動スタイル、自分が他者に与える印象などに注意を向け、自己
を社会的な対象として意識するといったものである。

本研究では、自己を社会的対象として注意を向けた直接的（外面的）なものと、それが他者に
どのように映っているかという間接的（内面的）な社会的対象のものとしての自己のとらえ方が
2種類あることになる。また、外面的自己にしか注意が向かないものと、それを経験している本
人にしか観察できない私的自己意識を伴うものとに分けられたとも考えられる。

つまり、自己意識を考えると、3つに分類して考えることが出来る。経験している本人にし
か観察できない私的な自己に対する注意の焦点づけ傾向である「私的自己意識」。他者に観察可
能な外面的な自己に対する注意の焦点づけである「外面的公的自己意識」。そして、他者の視点
から見た自己の内面的な部分に対する注意の焦点づけである「内面的公的自己意識」である。

「いつも自分を意識している」（項目19）は、第1因子、第3因子とも高く負荷していた。こ

れは、感情・動機といった私的自己に対する注意と、容姿・容貌といった外面的な公的自己に対する注意の両側面を含んだ項目になっているといえる。つまり、注意の方向性がはっきりしない、自己意識全般を指すアバウトな項目なのだろう。この項目は、自己意識に関するものなのに、第2因子に高く負荷しなかったのは、他者の視点から見た自己に対しての意識が、間接的であり、外面的な自己を踏まえて二次的に起こる意識であるからだと思われる。他者の反応を気にしている自己に向けられている注意は、自己意識が他者の視点に覆いかぶされた二重構造になっており、自分を意識しているという感覚では表すことができない。

「自分の態度やふるまい方には気をつけている」(項目11)は、どの因子にも高く負荷しなかった。「気をつける」という語句が、注意・関心などのような意識ではなく、意識後の行動を指しているためであると思われる。

表1 自己意識尺度の項目と因子パターン

| 項 目 | F1 | F2 | F3 |
|---------------------------------------|---------|---------|---------|
| QC4 知らぬ間に自分の感情や心の動きに注意を向けている。 | .73943 | .30410 | .07518 |
| QC1 自分の動機や気持ちをいつも分析している。 | .70214 | .11164 | .04195 |
| QC9 常に自分自身を理解しようと心がけている。 | .67985 | .02358 | -.04118 |
| QC21 たえず自分の事を詳しく調べようとしている。 | .61510 | .08251 | .26598 |
| QC6 自分の感情や気持ちに、注意を払っていることが多い。 | .59288 | .29822 | .18110 |
| QC17 自分についてよく考え込む。 | .55003 | .37880 | .13277 |
| QC12 何かの課題に取り組んでいるときでも、心の動きを意識している。 | .54958 | .06891 | .01466 |
| QC3 自分自身についてよく空想する。 | .50047 | .26609 | .27303 |
| QC8 気分の変化には敏感である。 | .47691 | .17290 | .05500 |
| QC16 自分についてよく反省する。 | .44867 | .39139 | .04276 |
| QC14 自分の心の動きを、他人の目で眺めているような気がすることがある。 | .44558 | .08992 | .03713 |
| QC2 自分が他の人にどう思われているのか気になる。 | .15032 | .74340 | .24418 |
| QC5 自分が人にどのように見えるかを意識している。 | .26378 | .67623 | .35814 |
| QC15 人によい印象を与えたかどうか気になる。 | .10720 | .65484 | .20883 |
| QC10 自分の性格が人にどのように見えるかを意識している。 | .30615 | .62015 | .21816 |
| QC18 自分の体型やスタイルを常に意識している。 | .03574 | .09255 | .79881 |
| QC7 自分の外見には気を配っている。 | -.03830 | .22475 | .65426 |
| QC20 出かける前には必ず鏡を見る。 | -.00335 | .18856 | .54310 |
| QC19 いつも自分を意識している。 | .48632 | .07338 | .53366 |
| QC13 自分をどのように見せるかに関心がある。 | .23942 | .35067 | .51493 |
| QC11 自分の態度やふるまい方には気をつけている。 | .17540 | .21752 | .28802 |
| 寄 与 | 6.99756 | 2.53436 | 1.42827 |

5. 他者意識について

自己意識尺度と同じように、使用した他者意識尺度の構成要素は明らかにされているが、1997年文教大学在学中の学生がそれにあてはまるかどうかどうするかを見るために因子分析を用いて検証した。

その結果、固有値1.57936以上、3因子が説明可能な因子として抽出された。3因子構造で累積因子寄与率は、53.5%であった。

因子分析した結果、22の質問項目は以下の通りに分類された。

第1因子は、固有値7.86353で因子寄与率は35.7%であった。

- 21. 他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない。
- 13. 他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている。
- 9. 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう。
- 19. 人の言動には絶えず注意を払っている。
- 16. 人の気持ちを理解するように常に心がけている。

などの項目が高く負荷していた。これらは、他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識・関心である。またそれだけでなく、外面に表出された他者の表情や態度なども手がかりにして、他者の内面を理解しようとする、他者の内面に注意を向ける傾向である。よって「内的他者意識」と命名する。

表2 他者意識尺度の項目と因子パターン

| 項 目 | F1 | F2 | F3 |
|-----------------------------------|---------|---------|---------|
| QB21 他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない。 | .77378 | .13100 | .00161 |
| QB13 他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている。 | .75246 | .24540 | .10339 |
| QB9 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう。 | .65789 | .25965 | .13742 |
| QB19 人の言動には絶えず注意を払っている。 | .64438 | .26213 | .00872 |
| QB16 人の気持ちを理解するように常に心がけている。 | .51777 | .18637 | -.10493 |
| QB1 他者の心の動きをいつも分析している。 | .48787 | .30534 | .10029 |
| QB15 人がどんなことを感じたり考えたりしているのかが気になる。 | .46746 | .45646 | .18154 |
| QB20 人のマナーやふるまいに目が向きやすい。 | .45683 | .05065 | .28654 |
| QB5 人の考えを絶えず読み取ろうとしている。 | .45372 | .34343 | .08127 |
| QB22 人がどのようにして自己表現するのかが気になる。 | .42776 | .24577 | .10409 |
| QB11 人のことにしばし思いをめぐらす。 | .30637 | .72179 | .12314 |
| QB7 人のことをあれこれと考えていることが多い。 | .28531 | .71428 | .18003 |
| QB14 人のことがいろいろと心に浮かぶ。 | .31458 | .68549 | -.00442 |
| QB12 人のことが気になる。 | .23035 | .67914 | .27116 |
| QB3 人のことをよく空想する。 | .15098 | .62805 | .09668 |
| QB4 いつも人のことを意識したり考えたりしている。 | .27404 | .62392 | .30799 |
| QB8 人の態度やふるまいが気になる。 | .31060 | .45453 | .35047 |
| QB18 人の気持ちが知りたい。 | .32998 | .42157 | .22553 |
| QB10 他者の服装や化粧などが気になる。 | .12477 | .09107 | .76551 |
| QB17 人の体型やスタイルなどに関心がある。 | .08213 | .07836 | .69104 |
| QB2 人の外見に気をとられやすい。 | .01703 | .16028 | .63996 |
| QB6 他者の表面的な印象に心を奪われやすい。 | -.01428 | .26913 | .48044 |
| 寄 与 | 7.86353 | 2.32852 | 1.57936 |

第2因子は、固有値2.32852で因子寄与率は10.6%であった。

- 11. 人のことにしばしば思いをめぐらす。
- 7. 人のことをあれこれと考えていることが多い。
- 14. 人のことがいろいろと心に浮かぶ。
- 12. 人のことが気になる。

などの項目が高く負荷していた。これらは、その場に現前する他者に直接意識や関心を向ける「直接的関心」に対し、現実の他者から離脱した連想的・回想的関心である。よって、第2因子を「空想的他者意識」と命名する。

第3因子は、固有値1.57936で因子寄与率は7.2%であった。

- 10. 他者の服装や化粧などが気になる。
- 17. 人の体形やスタイルなどに関心がある。
- 2. 人の外見に気をとられやすい。

などの項目が高く負荷していた。これらは、他者の化粧や服装、あるいは体形やスタイルなどの外面に表れた特徴といった、他者の外面への注意の焦点づけである。よって、第3因子を「外的他者意識」と命名する。この意識は、注意・関心は、格好の良さなどの外面にとどまり、それ以上の深入りはない。

「人がどんなことを感じたり考えたりしているのかが気になる」(項目15)が内的他者意識と空想的他者意識の両因子に高く負荷した理由として、現前する他者に対して行われる「感じる」という行動は、空想的な意味合いも兼ねる行動であるといえると思われる。

6. 自己意識についての同一性地位間の差異について

自己意識尺度で分類された因子ごとに、同一性地位別に多重比較を行った。自己意識については、「私的自己意識」の因子のみ、同一性地位間で有意な差が認められた。

「私的自己意識」の因子についての因子得点は、同一性達成地位、モラトリアム地位、権威受容、A-F中間、D-M中間・同一性拡散の順に高くなる傾向であるといえる。 $F(5,258) = 4.31$ ($P < 0.05$)

同一性地位別の因子得点の平均値は、以下の通りである。

| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|-------------|--------|---|---|---|---|---|---|
| 1. 同一性達成地位 | -.7198 | | * | | | * | * |
| 2. A-F中間地位 | -.0158 | | | | | | |
| 3. 権威受容地位 | -.2831 | | | | | | |
| 4. モラトリアム地位 | -.3985 | | | | | * | * |
| 5. D-M中間地位 | .1701 | | | | | | |
| 6. 同一性拡散地位 | .2961 | | | | | | |

注) *は5%の有意水準で、差がみられたものである。以下同様。

同一性達成地位は、A-F中間・D-M中間・同一性拡散より、「私的自己意識」の因子が有意に低く負荷し、またモラトリアム地位は、D-M中間・同一性拡散より、「私的自己意識」の因子が有意に低く負荷している。

以上の結果から、3群に分けて考えることができる。1群は、値の低い反応のモラトリアム地位・同一性達成地位群。2群は、値の高い同一性拡散地位・D-M中間地位群とA-F中間地位の比較的高い群。最後の群は、権威受容地位の低いとも高いともいえない中位群である。

私的自己意識の心的過程として、感情の強化（感情の両極化傾向）と「自己知識」の明瞭化がある。自己知識の明瞭化については、焦点を当てる内容によって明瞭化される領域は違う。

青年期は、周囲から役割の選択と傾倒を求められている。しかし、傾倒している場面を、悩み自ら選択してはいないA-F中間地位は、感情の強化により、動機づけを行い、価値ある領域に専心しているのではないだろうか。現在自己投入している領域について、取り組んでいるときでも心の動きを意識し、専心している感情が私的自己意識により、さらに一層の専心を生む。同一性達成地位と権威受容地位の中間で、親の価値観を全面的に受け入れているというわけではないので（過去の危機から）、「親の価値観を受け入れているものどこかしっくりいかない。親の価値観に安住している部分もある」ということから、自己投入するには自己の内発的動機づけを望んでいることが、私的自己意識の比較的低さに現れたのだろう。

D-M中間地位と同一性拡散地位は、自分が何者かが曖昧で、確固とした自己を決定することができず「あれも、これも」というまとまりのない状態になる。いいかえれば、社会的に価値ある領域を選択・専心して、同一性を持つことに抵抗感があるということである。私的自己意識の高い人は、強制や自由の制限に対して敏感で、抵抗や反発を示しやすいことが多くの文献からわかっている。このことは、2つの地位が私的自己意識に関して高い理由であろう。

7. 他者意識について

他者意識尺度の因子については、3つの因子得点のそれぞれに有意な差がみられた。

①第1因子・内的他者意識についての同一性地位別の因子得点の平均値は、以下の通りである。

「内的他者意識」の因子得点は、同一性達成、モラトリアム、権威受容、A-F中間、D-M中間、同一性拡散の順で高くなる傾向であるといえる。F(5,258) = 3.15 (P<0.05)

| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|-------------|--------|---|---|---|---|---|---|
| 1. 同一性達成地位 | -.4340 | | | | | * | * |
| 2. A-F中間地位 | -.1516 | | | | | | |
| 3. 権威受容地位 | -.3744 | | | | | | |
| 4. モラトリアム地位 | -.4215 | | | | | * | * |
| 5. D-M中間地位 | .1503 | | | | | | |
| 6. 同一性拡散地位 | .3825 | | | | | | |

同一性拡散地位とD-M中間地位は、同一性達成地位とモラトリアム地位よりも内的他者意識の因子得点について有意に高いことがわかった。

以上の結果から、同一性達成地位で「内的他者意識」を考える場合、地位は3つの類似した群に分けて考えられる。1群は、因子得点の低い同一性達成地位・モラトリアム地位群。2群は、得点の高いD-M中間地位・同一性拡散地位群。そして3群は、低いとも高いともいえない中間の権威受容地位・A-F中間地位群の3群である。

②第2因子・空想的他者意識の因子について、同一性地位別の因子得点の平均値は、以下の通りである。

「空想的他者意識」の因子得点は、権威受容、モラトリアム、D-M中間、A-F中間、同一性達成、同一性拡散の順に高くなる傾向がある。F (5,258) =1.56 (P<0.05)

| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|-------------|--------|---|---|---|---|---|---|
| 1. 同一性達成地位 | -.2548 | | | | | | |
| 2. A-F中間地位 | -.0595 | | | | | | |
| 3. 権威受容地位 | .6400 | | | | | | |
| 4. モラトリアム地位 | .2430 | | | | | | * |
| 5. D-M中間地位 | .0471 | | | | | | |
| 6. 同一性拡散地位 | -.4070 | | | | | | |

モラトリアム地位は、同一性拡散地位より空想的他者意識の因子に有意に高くかかわっていることがわかった。

以上の結果から、「空想的他者意識」の因子に対して、同一性達成地位に3つの類似した反応が見られた。1つは、因子得点の高いモラトリアム地位群。2つ目は、得点の低い同一性拡散地位群。3つ目は、同一性達成地位・A-F中間地位・D-M中間地位・権威受容地位群である。権威受容地位は、平均値をみると、モラトリアム地位より高いが、分散が大きいため因子得点の高い群として考えることができない。

③第3因子・外的他者意識の因子について、同一性地位別の因子得点の平均値は、以下の通りである。F (5,258) =3.72 (P<0.05)

| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|-------------|--------|---|---|---|---|---|---|
| 1. 同一性達成地位 | .4651 | | | * | | * | * |
| 2. A-F中間地位 | .5343 | | | * | | * | * |
| 3. 権威受容地位 | -.7595 | | | | | | |
| 4. モラトリアム地位 | .0337 | | | | | | |
| 5. D-M中間地位 | -.1235 | | | | | | |
| 6. 同一性拡散地位 | -.3778 | | | | | | |

「外的他者意識」の因子得点は、A-F中間、同一性達成、モラトリアム、D-M中間、同一性拡散、権威受容の順に高くなる傾向がある。

同一性達成地位とA-F中間地位は、権威受容・同一性達成・D-M中間地位よりも、因子得点が有意に高いことがわかった。

その結果、「外的他者意識」の因子に対する反応を、3群に分けて考えることができる。1群は、得点の高い同一性達成地位・A-F中間地位群。2群は、得点反応の低い権威受容地位・D-M中間地位・同一性拡散地位群。3群は、低いとも高いともいえないモラトリアム地位群である。

以上を、自我同一性地位を中心にまとめると次のようになる。

同一性達成地位は、すでいくつかの選択肢の中から自分自身で真剣に考えた末、意思決定を行い、それに基づいて行動している。また、適応的であり自己決定力、自己志向性がある。環境の変化に対しても柔軟に対応でき、対人関係も安定している。

他者との関係の中で相手の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解することや、他者との円滑な関係を形成し維持するには内的他者意識が必要不可欠である。この内的他者意識において、同一性達成地位がD-M中間地位・同一性拡散地位と比べて低かったのは、すでに他者からの期待や価値づけを取り入れながら、自己の経験から得た自己関連情報を概念化し構造化した自己概念ができており、特に他者の内面に注意を向ける必要がないからだと考えられる。これは、自己中心的なわがままとは違い、すでに他者との関係を円滑に形成できる柔軟な体勢を持っており、その場に応じて自ら作りあげた自己理論を基に対応できるということであろう。

責任ある社会の一員として他者の外面に注意を向けるということは、選択した地位にふさわしい外見をとることの必要性が他者との関係の中で求められているからかもしれない。そして、一目瞭然に他者の役割を認識できることが友好的な関係を形成する材料になっているのかもしれない。これが、外的他者意識において、同一性達成地位が権威受容地位・D-M中間地位・同一性拡散地位に比べ高かった理由であろう。また空想的他者意識においては、中位群だった。

A-F中間地位は、外的他者意識において高い群で、内的他者意識・空想的他者意識においては、中位群だった。同一性達成地位と権威受容地位との中間のこの地位は、比較的環境に柔軟に対応できるが、内的他者意識が同一性達成地位（中位群）に比べ高いことから、他者の反応に流され、自己決定力・自己志向性が弱い、他者と自己の思惑との間で揺れ動いている、自己概念の不安定さがうかがえる。

権威受容地位は、外的他者意識において低く、内的他者意識や空想的他者意識においては、中間群だった。これは、親や権威の価値観に疑問を感じたり、悩んだりすることがなく、受け入れ、専心していることの現れであると思う。環境の変化などのストレス下で柔軟な対応が困難であるのも、外的他者意識が低く、他者の反応に鈍いからであろう。

モラトリアム地位は、内的他者意識において低く、空想的他者意識において高い群、外的他者意識において中位群だった。この地位は、現在、いくつかの選択肢の中で悩み、その解決に向けて模索している。決定的な意思決定を行うことがまだできないために、行動に曖昧さが見られるのが特徴である。しかし、決定的な意思決定ができないまでも、悩み解決に向かって途中である。実際に他者を前にした場合、それまでの不確実である自己概念を基に試すべく、同一性達成地位と同じような他者に対する意識が考えられる（自己概念のリハーサル）。しかし、まだ、不確実なために修正や確認が行われる。そこで、現前しない他者に注意をむけ、他者からの期待や価値づけを想像しながら、自己の経験から得た自己関連情報を概念化し構造化しようとして解決に向かおうとしている姿がうかがえる。

D-M中間地位は、内的他者意識において高く、空想的他者意識において中間群、外的他者意識において低い群であった。つまりモラトリアム地位と同一性拡散地位の中間群は、現前する他者の内面に注意が強く向けられ、外面に向けられる注意が弱いということである。自分が何者であるか曖昧であるために自分を想像することができず、他人を想像することも困難である。この地位が他者との関係の中で相手を認識する時、外面からの情報では想像するのが困難でなかなか相手を理解できない。そのために、相手が何を考えているか、ちょっとした身の振る舞い方に注意を向け、情報を得ようとする。自己像がなく、選択しようとする役割を想像できないこの地位

は、相手の役割からではなく、相手の内面に目を向けているのではないだろうか。

同一性拡散地位は、内的他者意識において高く、空想的他者意識において低く、外的他者意識において低い群だった。内的他者意識が高く、外的他者意識が低いのは、D-M中間地位と同じ理由のためであろう。また、有意な差はないが、D-M中間地位より内的他者意識において高く、外的他者意識において低くなっているのは、D-M中間地位が同一性拡散地位とモラトリアム地位の中間に位置する地位であるからだと思われる。空想的他者意識が低いのは、モラトリアム地位にみられる現前しない空想的な他者に注意をむけ、他者からの期待や価値づけを想像しながら、傾倒する何かを模索している姿とは逆の、積極的に関与しないことに積極的になっているという姿の現れであると思う。選択せず、すべてのことをそのままにし、確固とした自己を決定することができない。他者の期待や価値づけも考えたくない、選択肢の中で解決に向かうという指標でモラトリアム地位と同一性拡散地位は、逆の方向性にあるといえるだろう。

文 献

- 1) 本田時雄・阿部 亘 (1998) 「夢と現実のはざままで」生活科学研究, 第22集, p.71-80
- 2) 小此木啓吾 (1986) 「現代人の心理構造」NHKブックス
- 3) 貝塚成樹 (1985) 「男らしさ・女らしさ・人間らしさの構造と特性についての考察」文教大学人間科学部卒業論文
- 4) 梶田叡一 (1994) 「自己意識心理学への招待」有斐閣ブックス
- 5) 河合隼雄 (1971) 「コンプレックス」岩波新書
- 6) J. A. クローセン (1986) 佐藤慶幸・小島 茂 (訳) (1987) 「ライフコースの社会学」早稲田大学出版部
- 7) 古谷野亘 (1988) 「数学が苦手な人のための多変量解析ガイド」川島書店
- 8) 辻平治郎 (1993) 「自己意識と他者意識」北大路書房
- 9) 無藤隆・麻生武・内田伸子・落合良行・楠見孝・やまだようこ (1995) 「講座 生涯発達心理学4」『自己への問い直し——青年期』金子書房
- 10) 山内光哉 (1990) 「発達心理学 (下)」——青年・中年・老年—— ナカニシヤ出版